



Title	序文
Citation	科学技術コミュニケーション = Japanese Journal of Science Communication, 23: 37-39
Issue Date	2018-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/71128
Type	bulletin (other)
File Information	04_jyobun_37-39.pdf



[Instructions for use](#)

小 特 集

北海道大学 CoSTEP シンポジウム

遠くて近きは～人と動物の“ほどよい”距離感～

1. はじめに

人間社会は、多くの動物の犠牲のうえに発展してきた。食肉を大量に安定供給するための畜産動物の飼養、人間の健康や生活を守るための害虫・害獣の駆除、医薬品開発や安全性試験のための動物実験。彼らの犠牲なくしては現在の生活レベルを保つことはもはや不可能であり、我々は必要悪としてその恩恵を享受している。しかし、実際に生命と向き合う現場の人間たちを除いては、その事実を意識して生活する人は少ないだろう。それはおそらくごく当然のことで、見えないところで起きている事柄を自分事に引きつけて考えることは、とても難しいものである。特に近年の科学技術の発達によって我々のライフスタイルは急激に変化し、動物や自然からどのようにして恩恵を受けているのか、より一層見えにくくなっている。

一方で、動物との軋轢は顕在化してきた。人と動物の関係性が、これまでにない速さと規模で変わりつつあるのだ。

2. 変化した人と動物の関係性

例えば、人間の生活圏が野生動物の行動圏のギリギリまで拡大し、街と山のあいだの緩衝帯となる里山が消失したことで、山から降りてきたクマが人を襲ったり（神奈川県 2018）、住宅街にサルが侵入して家庭菜園やゴミ捨て場を荒らしたりするようになった¹⁾（梶山 2018、波間 2018）。そのため、かつてはほどよい距離に住む隣人であった野生動物たちが、困った「害獣」に変貌し、人間たちは自身の安全と生活を守るために、積極的に動物を退治しなくてはならなくなった。

また、愛玩用や食用に海外から連れてきた動物の管理責任を放棄した結果、在来生物を保護するために外来生物を駆除しなくてはならなくなった²⁾（環境省 2018）。アライグマは家屋に大きなダメージを与えることもあって積極的な駆除の対象となっているし、ブラックバスはテレビ番組で駆除作戦が特集されるほどお馴染みの国民的悪者となった。さらに、記憶に新しいところでは、昨年6月、世界的に侵略的外来生物として恐れられるヒアリの日本への侵入が初めて確認された³⁾。最近では当初の目新しさがなくなったためほとんど報道されなくなったが、その後も日本各地の港でヒアリ侵入が相次いで確認されている（環境省 2018）。海外で積み荷に混入したヒアリのコロニーがそのまま船で連れてこられたという。ヒアリに刺されると死に至るケースもあるため、大規模な管理対策が講じられている。

こうして、困った野生動物たちの襲来により、我々人間はその対策に頭を悩ませることとなっている。

3. 動物たちは「襲来」したのか

しかし、動物たちはほんとうに「襲来」したのだろうか。ほどよい距離感を踏み越えたのは、人間と動物、どちらが先なのだろうか。

昨年春から夏にかけて、札幌市街地の公園に凶暴なキツネの一家が居座り、近隣住民に危害を加えるという事件があった⁴⁾（北海道放送 2017）。近年の札幌ではもともと、時間帯によっては街中でキツネを見かけることは珍しくないが、さすがに都市公園の運動場のど真ん中でくつろぐ光景

は珍しい。よく見てみると、彼らはどこからかビニール袋を引きずってきて中身を食べていた。ゴミ集積所や一般家庭の庭から持ってきたのだろう。また近隣住民によれば、どうやら餌付けをしている人がいるらしいとのことであった。つまり、我々人間の側がキツネ達に、ここはあなた達のなわばりですよ、というメッセージを送ってしまったことになる。彼らにしてみれば、自分のなわばりを侵入者から防衛しただけのことだろう。

4. 動物問題を考える

無論、ここで述べたいのは、偏った自然愛護的な動物擁護論ではない。我々が日常生活を営むために必要不可欠である動物の利用や管理について、「必要悪」の一言で思考停止するのではなく、どのようなやり方であれば適切で、かつ許容可能なのかを、科学者任せでなく我々市民も考える必要があるのではないかということだ。

そこで、北海道大学科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) は、人と動物の関係性の変化に伴ない、我々は動物との関係に対し、どのような視点をもち、どう折り合いをつけていけばよいのかを考える場として、公開シンポジウム「遠くて近きは～人と動物の“ほどよい”距離感～」を開催した (2018年3月10日、北海道大学物質科学フロンティアを開拓する Ambitious リーダー育成プログラム共催)。人間が持つ殺生に対する後ろめたさや、「なんだか気持ち悪い」「どういうわけか可愛らしい」といった自然な感情の部分にも焦点を当てることで、人と動物との共生の在り方について考える会となった。

登壇者には、異なるステークホルダーに属するお三方を招いた。保全生態学を専門とし外来生物駆除研究の第一人者である池田透氏 (北海道大学大学院文学研究科教授) からは、科学的根拠に基づいたアライグマ駆除計画を立てることで確実に頭数を減らし、無駄死をなくす試みをご紹介いただいた。また、当初は「かわいい」動物を殺す行為に対し市民から強い反発にあったものの、丁寧に辛抱強く対話を続けることで、徐々に市民からも理解を得られるようになったとの逸話が語られ、専門家から一方的に知識を押し付けない動物管理の必要性が述べられた。

野生動物管理や保全活動を主導する出島誠一氏 (日本自然保護協会自然保護部副部長・生物多様性保全室長) からは、専門家と地域住民のあいだをつなぐコミュニケーターの視点で、自然保護活動に対する地域住民の不信感を払拭するための対話の必要性についてお話しいただいた。また、身近でない猛獣・ツキノワグマに対しての意識調査では、「無知・無関心」である一方で「絶滅してほしくない」という、矛盾した回答が大半を占めたという結果から、自分事としての実感のないテーマについて熟考し合理的に判断することの難しさが語られた。

ペットの殺処分ゼロを目指し戦略的に活動する大西純子氏 (認定NPO法人ピースウィンズ・ジャパン ピースワンコ・プロジェクト プロジェクトリーダー) からは、ペット産業のひずみが生んだ遺棄動物の増加と殺処分の現実についてご紹介いただき、棄てられた元ペットを訓練して社会の中で新たな役割を与える試みについて語っていただいた。役に立つ、立たないで生命の重みはなんら変わるものではないが、イヌの能力や性質を活かしつつ人間の側も助かる win-win の形を目指すこの取り組みは、無関心層に訴える手段としても効果的だろう。

シンポジウム後半では、事前に参加者から集めておいた質問やコメントをもとに、登壇者らによるパネルディスカッションを行なった。学会や講演会等で語られることの少ない登壇者自身の個人的な本音の見解を交え、自然観を醸成しにくくなった現代社会においていかに共生の道をさぐるべきか、大いに語る場となった。

5. さいごに

科学者と市民との相互理解を妨げる原因として、専門知識レベルの差だけでなく、科学者側の感覚の乖離が指摘される。しかし、もちろん科学者が感情を完全に排除して生きているわけではない。学術の場では冷静さが絶対的に求められるため、あえて感情について語ることを遠ざけるきらいがあるのは事実だ。今回は、登壇者に科学者、科学者と市民をつなぐコミュニケーター、最も市民感情に近いNPOプロジェクト代表、という異なるステークホルダーの方々を招き、我々人間の行動の根拠である「感情」に焦点を当てた議論を試みた。このシンポジウムが科学者と市民の双方にとって、人間が持つ自然な感情に蓋をせず気持ちを共有する場に、そして遠くて近い隣人である動物たちに思いを馳せるきっかけとなれば、幸いである。

文責：池田貴子（科学技術コミュニケーション編集委員）

注

- 1) 神奈川県では、人里でのツキノワグマの個体の目撃や痕跡情報が増加したことを受けて、ウェブサイトにて2015年以降のツキノワグマ情報を公開し随時更新している（文献参照）。また、栃木県日光市では2016年頃からニホンザルが市街地中心部に現れるようになり、家屋に侵入して食物を奪ったり家庭菜園を荒らすなどの被害が増加している。2018年春には島根県松江市の住宅街で、同じくニホンザルの目撃が相次ぎ、小学生が追いかけられるなどの被害があった。
- 2) 2005年6月より「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」が施行され、特定外来生物の飼養、栽培、保管、運搬、輸入等の規制、および国や自治体による防除が行われることとなった。2018年4月現在、特定外来生物には哺乳類25種類、鳥類7種類、爬虫類21種類、両生類15種類、魚類26種類、昆虫類21種類、甲殻類5種類、クモ・サソリ類7種類、軟体動物等5種類、植物16種類が指定されている（文献参照）。
- 3) 2017年6月13日に兵庫県の港で侵略的外来種であるヒアリが日本で初めて確認され、以降、主に関東以南～九州で相次いで確認された。2018年6月15日には、中国アモイ港から運ばれ大阪港で陸揚げされたコンテナから2000個体超のヒアリが見つかり、作業員ら2人が刺された。ヒアリは2017年の初確認以降、12都道府県で確認されており、大阪で29件目となった。
- 4) 2017年6月から8月にかけて、札幌市清田区の都市公園内にキツネの家族が居つき、人を威嚇したり子供からビニール袋を奪おうとして襲うなどの行動が目撃された。近隣住民の訴えにより公園をネットで囲うなどの対策が講じられたが、その後も公園内でキツネのフンが見つまっている（文献参照）。

●文献：

北海道放送 2017: 「もうひとホリ～清田区の公園にキツネ～」『今日ドキッ!』, 2017年9月6日。

北海道放送 2017: 「もうひとホリ～札幌の公園キツネ 住民がSOS～」『今日ドキッ!』, 2017年8月21日。

梶山天 2018: 「日光悩ます野生のサルたち ロケット花火で対抗」『朝日新聞デジタル』2018年1月15日, <https://www.asahi.com/articles/ASKCZ5K49KCZU00X.html> (2018年6月25日閲覧)。

神奈川県 2018: 「ツキノワグマ情報について」『神奈川県』2018年6月8日, <http://www.pref.kanagawa.jp/docs/t4i/cnt/f3813/> (2018年6月25日閲覧)。

環境省 2018: 「大阪府内におけるヒアリの確認について」『環境省』<http://www.env.go.jp/press/105635.html> (2018年6月25日閲覧)。

環境省 2018: 「特定外来生物等一覧」『日本の外来種対策』2018年4月1日, <https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/list.html> (2018年6月25日閲覧)。

浪間新太 2018: 「島根」松江市でサル目撃相次ぐ 小学生が追いかけられる」『朝日新聞デジタル』2018年5月12日, <https://www.asahi.com/articles/ASL5C4HBDL5CPTIB006.html> (2018年6月25日閲覧)。